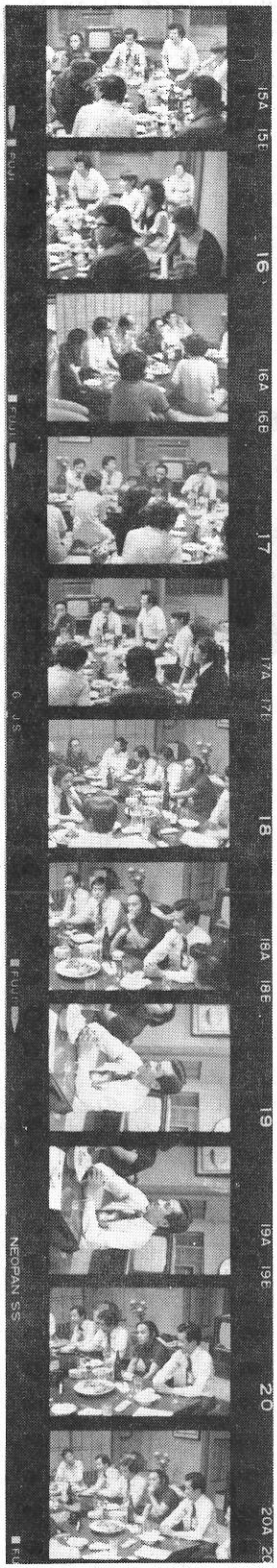
日本放送作家協会■放送文化研究委員会レポート〈1〉

協会広報委員会編集



＝＝＝

これからのラジオはどうなる
――放送作家はいかに関わるか――

拡大研究委員会（要旨）

更に進む生ワイド化

大倉（司会）十月編成でラジオは変るか、あるいは変らないのか、そのへんから具体的に。

瀬崎（RF）大きく変るのはナイターあけのワクだけだが、ここが月金ベルト二時間の生ワイドと、一時間の音楽番組に。ワイドは野球・競馬の聴取層をそのまま狙って、音楽、スポーツ、芸能ニュース、ギャンブル中心の「男のラジオ・トウナイト」。

上野（LF）ブロック・ワイドというか、パーソナリティ中心につないで行くワイド志向は変らない。全体的に中高生中心の音楽番組が多いが、トークでは十分の「ショート・ショート」が新らしく始まる。これは一寸面白くなると思う。

佐藤（QR）―タイム・テーブルをいきなり広げて―ごらんの通り、録音番組は早朝と夜十一時代の二時間半だけ。後は全部生放送になる。開かれた電話線で一日中入って来る聴取者の反応は新鮮で、ここにフイクションが入って来るのが一寸辛くなる。その中で、放送作家との関わり方は、よき協力者という形になっているが、それでよいのか、そのへんを話し合いたい。

松井（TBS）うちは四月に大きな改編をしたので十月は微調整といったところ。ナイター・ゾーンの一時間が、ゴールデン・ワイドという生番組になる。トーク番組として新しく始まるのは沢村貞子の「おふくろ説法」加藤武の「ラジオ国語辞典」など。TBSとしては朝からやっている生ワイドの中に、録音番組のいいものをちりばめていきたい。大人にもアッピールするものをと考えている。

作家の仕事は減る？

司会　脚本代を使わない番組が増えるという傾向はないですか？

上野　それはない。やはり番組が成功するため、という方が先行します。

佐藤　ワイドを作る上でも必要なら払うのが当然。しかし一般的に言えば単価が高いと営業が尻込みすることは事実ですね。

司会　しかし、生が増えれば、作家の仕事は減りませんか？

松井　やはり番組によって違う。作家の占める比率の圧倒的に高いものと、データをつっこむ程度のものと、いろいろある。

佐藤　実はQRでは、スタッフだけで全部構成する番組を作ったんです。打合わせの時間を充分にとるとかえって活気が出る。録音の部分は勿論作家を使うが今はそれがないまぜになっている、というのが正直な所です。

上野　LFの場合は人数が少ないので、書く人は非常に多いですよ。ワイドの場合、使っても使わなくても、データをつっこんでもらって、パーソナリティがそれをネタにしゃべる形です。

知られていない作協会員

司会　生ワイドの中で働らくいわゆる構成者とドラマの作家。協会には両方いるわけですが、各局さんは作協メンバーというとどんなイメージですか？

上野　若いディレクターは作協のメンバーを全然知らないし、どこへ頼めばいいかも知らない。生だけじゃなく、ドラマやドキュメントでもそうです。我々の世代から見ても古いというイメージがあって、特にドラマを書いている先生というのは人種がちがうような気がしますね。

松井　老大家から若い人まで、おつきあいしたいと思っているが今、作協に私の欲しい人がいるかどうかがわからない。芝居や映画のジャンルの方が目に入りやすいですね。

瀬崎　若いディレクターは、作協を全然知りませんね、全部ライターという言葉で一括していてなまじ、作協の先生だなどというと敬遠する。

佐藤　過去のドラマの黄金時代を知っている世代だけですね、作協のメンバーとつき合ってるのは。

上野　レコード会社などは月に一度ミーティングがあって、売り込みがすごいですよ。今日はこういう会合に呼んで戴いて嬉しいんですが、作協がこういう会を持った事は始めてでしょう？若いディレクターや作家が集まって、やりたい企画について話し合えたら素晴しいと思いますね。

どんな企画なら通る？

司会　通りいい企画というか、我々が、ギャラがもらえるというのはどんな企画ですか？

松井　本当にやりたい企画があって、ギャラはいくらでもいい、というのなら、かなり通ります。しかし、安くしたくない、五割増し、というのなら、そのかわりこれはいい、という企画を出して下さい。

司会　主観的じゃなく、データを揃えてということですね。

松井　そうしたいろんな関門をくぐり抜けた企画というのは、それなりの普遍性がありますから。

横光　スポンサーをつければ通りますか。

佐藤　それは勿論強いですが――。

上野　LFの場合はちがう。営業に負けて不本意な番組を作っているが、我々はいいものを作ろうという仲間が欲しいんです。今まではスポンサーに喜ばれるものを作って来たが、これからのラジオは聴く人のニーズに応えるものを作るべきです。

佐藤　力をつけること、じゃないか。地味でも、これは作協のみんなが応援している、というものなら売れるんじゃないかな。

横光　ぼくは最近、ラジオドラマのプログラム・ピクチュアをやりたいという気はさらさらなくなった。経済的に全くペイしないんです。しかし、ラジオ作品を作るということなら、持ち出しでやってもいいという気があるんですね。

松井　津瀬宏の書いている「小沢昭一的こころ」というのがあるが、作家やディレクターが身銭切ってもやりたいという番組があれば、ラジオはそのへんから変るような気がする。

ドラマの話が出たついでだが、アメリカでは、三六五日ベルトの一時間ドラマがスタートしてネットワーク・セールスで大成功ということです。三分の二はリピートだが、三分の一はオリジナルで民放連でも刺戟を受けています。ラジオの考え方もいろいろあるが、リスクにかけるというか冒険することも必要で、その点、クリエーターのみなさんからの圧力というか、働らきかけが欲しいですね。

作家側も売り込みを

横光　いい意味での作家の売り込みが必要ということですね。

局側　それは絶対必要ですね。

佐藤　作協は、教室なんかやって新人を育てているんでしょう？そのプロフィルなど、局へ知らせているんですか？

上野　我々全然知らないですね。

金子　その点はテレビ局も同じですね。作家の名簿は手許にあるが、いざ仕事となると、顔見知りの人に頼んでしまう。日常のつながりが全然ないと、誰方がどんな仕事をする人かわからないし。

水原　放送の仕事をしたいという人がこちら側には沢山いる。局側は人が欲しいのにいない。需要と供給のバランスが、取れていないのはどういうわけ？、

毛利　情報の窓口がないということですよ。我々としては広報不足なわけです。

司会　今まで構成部会で散々言ったが取り上げてもらえなかった。だから今日は、各ラジオ局の一線のディレクターの口から聞きたかったんです。

上野　我々は友達がいないんですよ。仕事の上での恋人になれるチヤンスもない。友達になりたいんです。

田井　これは作家の責任もありますね。私なども、LFに入り浸っていたことがあった。ドラマであれ、何であれ、本当にやりたい企画があったら、局に入り浸る位でなければダメ。当時の作家はみんなそうだった。こちらでお金出すから、一緒に下取材に行きませんか、とデイレクターを誘ったこともある位よ。古いかも知れないけど、ものを作る時は意気と意気じゃないかしら（「その通り」の声）

上野　とにかく、需要はいっぱいなんです。明后日から始まる番組の書き手がいない位なんですから。

佐藤　本当にやってくれる人がいたらいくらでも出したいです。

司会　どうすれば、その生ワイドの中に入れるんですか？

佐藤　逢って話すしかない。

上野　接触してもらうしかない。

松井　おたがいに言い寄ることですね。

構成作家の関わり方は

司会　ラジオをやろうという気さ

えあれば、関わり合うことはできる。というのはわかったような気がするが、例えば我々が若い人を紹介したら、どういう事を要求されますか？

佐藤　それは来てもらって、逢って、その人に何が向くか決めることで、みんなちがうでしょう。

瀬崎　番組のスタイルや内容によって、全く違いますからね。

松井　TBSの場合は、構成ワイドにはプロの作家、作協のメンバーは使っていない。プロの作家とは、例えば沢村貞子なら沢村貞子を通して、自分が言おうとする何かを持っている人、という風に思うんです。タレントを使うにしても、ぼくらが持っているせまい情報のわくを広げてくれる人を望んでいるのであって、べったり局にいてくれ等という気はありませんね。

上野　LFの場合は、行く年、来る年の構成をするような人から、番組のワクづけや、データーマンまで。あるいは我々のブレーンの役目をしてくれる人も全部ひっくるめて構成者、という風に呼びます。番組との関わり方もさまざまですね。

ギャラは払えるのか

司会　ラジオは安いというイメージがある。ぼくなども仕事を始めた頃と変らないが、お金は一体払えるんですか？

上野　うちの場合は払えると思います。ご満足が行くかどうかはわかりませんが、

佐藤　本当にやりたいものがあれば、ほかを削っても出します。

松井　全体を通しての予算だからこれにはかけるべきだと思えば出せるんです。我々としては、目からウロコが落ちるような企画が本当に欲しいんで、それがあれば欣客雀躍して出します。

瀬崎　……。

作家もグループ化を

上野　これは提案なんですが、我々局側の作り方はプロジェクト方式なんです。これに対して作家側にも、横光プロジェクトとか大倉プロジェクトというのがあると、今のシステムとしては非常に仕事がやり易い。もの書きは個人の仕事だが、今は個人の力は弱い。グループとしての方が有利で、今のままだと個人のライターとはつき合えなくなりそうです。

瀬崎　ワイド化の中では、それは絶対に必要。二時間半のワイドを一人では無理。かと言って個別に頼むと、番組がつながらなくなってしまう。そんな時、一つのプロジェクトがあって、大モノもいれば若い人もいる、というのだと頼みやすいですね。

佐藤　QRでもそれを考えた。常に一緒に仕事をしているライターを社長にして、考えてみようかと思った位です。

水原　そういう要求は実に多い。

横光　ここ数年来、我々もそれを考えているんです。

松井　ドラマは勿論、個人の仕事だが、そのほかはチーム単位になっていますからね。

司会　局側が作家集団に対するイメージとして、そんな形を期待していることは確かに言えそうですね。なるほど、わかりました。

上野　次はぜひ、夢を語り合いたいですね。（全員同感！）

司会　ぜひ。今日は長時間ありがとうございました。

（まとめ文責・片山）

×××××× ×××××× こぼればなし・あれこれ ×××××× ××××

◇　お互いに話し合う会、と言いながら、一方的に局側の話を聞く会になってしまったことで、局側からも参加の協会員からもいろ〳〵ご批判をいただきました。主催者側の打合わせ不充分ごめんなさい。

◇　当日の会がきっかけになって準組合員の津川さん、ニッポン放送で仕事が始まりました。ほかにも何人か進行中とか。現場同士が知り合う機会を、という願いが実を結んだわけです。

◇　録音用のカセット・テープを提供して下さった城悠輔、ウイスキーを寄付して下さった瀬崎義雄　布勢博一　毛利恒之　長尾広生のみなさん。そのほかさま〴〵な形で会を支えて下さったみなさん、本当にありがとうございました。

◇　現場で働らく仲間同志の交流と研究の場、これからも考えて行きたいと思います。協会員のみなさんの積極的な参加を心からお待ちしています。（片山）